

4月26日（日）サムエル記第二6章1～7節

「すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打たれた。彼はそこで、神の箱の傍らで死んだ。」（7節）

今日の箇所はウザ打ちなどと呼ばれて、よく知られた箇所です。ダビデは神の箱を運び上げようとして、イスラエルの精鋭三万をことごとく集めました。神の箱を運び上げるだけならば、あまりにも数が多すぎるのではないかと主張する人もありますが、恐らく神の箱に何かあった時の対処や神の箱を護衛する目的で、これだけの兵を集めたのだろうと思われます。彼らは、神の箱を新しい荷車に載せ、それを丘の上にあるアミナダブの家から（サムエル記第一7章1節参照）運び、アビナダブの子、ウザとアフヨがその新しい荷車を御していました。アフヨが箱の前を歩いていたということは、ウザは箱の後ろにいたのでしょう。ダビデとイスラエルの全家は、楽器を鳴らしながら、主の前ですべての杉の木の枝をもって、喜び踊りました。ところが、牛がよろめいたので、ウザは神の箱に手を伸ばして、それをつかみましたが、主の怒りが彼に向って燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打たれました。もしかするとダビデもなぜと思ったのかもしれませんが、ウザが打たれたことに多くの人がなぜと疑問を持ちます。例えば、牛がよろめいて神の箱がひっくり返りそうになっても、ウザはそのままにしておけばよかったのだろうかと思います。しかし問題はそこではありません。歴代誌第一15章11～15節で、祭司を呼び寄せ、「あなたがたはレビ人の各家系のかしらである」と言った後、「最初の時には、あなたがたがいなかったため、私たちの神、主は私たちに怒りを発せられた。定めにしたがって、私たちが主を求めなかったからだ。」と言います。民数記を見ますと、神の箱を運ぶのはレビ人の中のケハテ族（民数記3章31節参照）の役割でした。つまり、この時もレビ人の子孫である祭司が運べば、何の問題もなかったはずです。私たちも、自分たちの都合や考えで霊的なことを決めていこうとする傾向があります。しかし、そこには主を恐れる信仰がないことが多く、主はそこに怒りを燃やされるのです。

4月27日（月）サムエル記第二6章8～11節

「主の箱はガテ人オベデ・エドム家に三か月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。」（11節）

8節に「ダビデの心は激した。」とあります。これは、感情が激しく揺れ動き、怒り、興奮、あるいは不安などで落ち着かない状態を指します。また、別の注解書では、ダビデが不機嫌に

なつたと説明されています。その理由は、主がウザに怒りを発せられたからです。もしかすると、最初はなぜ主がウザを打たれたのか分からなかったのかもしれませんが、しかし、ダビデもさまざまなことが分かってくるにつれて、今度はダビデの心に主を恐れる心が出てきて、「どうして、主の箱を私のところにお迎えできるだろうか」との気持ちにさせられたのかもしれませんが。昨日も引用しましたが、歴代誌第一15章13節にありますように、本来はレビ人が運ばなければならなかった神の箱をウザが運んだことにより、神の聖さを守るために与えられたおきてをないがしろにすることにより、分を越えることにより罪を犯してしまったことをダビデは認めざるを得ませんでした。私たちも日々の歩みの中で、起ってくるさまざまな出来事により心が激することがあります。しかし冷静になって考えた時に、私たちの側で主に罪を犯した結果として起こったことはないでしょうか。そのようにして日々起こる出来事の中に悔い改めるべきことがあれば、謙遜に主の御前に悔い改めましょう。

もしこのまま神の箱がダビデの町に移されたなら、別のわざわいを招くかもしれない思っていたでしょう。ダビデは「ガテ人オベデ・エドムの家を回し」ました。(10節) ガテ人とはペリシテ人のことで、もしかするとダビデは自分たちに害が及ばないためように、ペリシテへ神の箱を持って行ったのかもしれませんが。ところが、主の箱はガテ人オベデ・エドム家に三か月とどまり、オベデ・エドムと彼の全家を祝福したのです。ですから、だれであったとしても主の箱を恐れをもって適切に扱うなら、主は豊かに祝福してくださるということです。私たちの信じる神は、聖く恐れるべきお方であると同時に、謙遜に信じて従う者には豊かに恵みと祝福を注いでくださるお方なのです。

4月28日(火) サムエル記第二6章12～15節

「ダビデは、主の前で力の限り跳ね回った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。」(14節)

神の箱のことでオベデ・エドムの家が祝福されたことを聞いたダビデは、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上げました。この時は、牛に荷車を引かせたりするのではなく、主の箱を担ぐ者たちがいました。歴代誌第一15章1節から見てまいりますと、このことがかなり細かく記されています。2節では「レビ人でなければ、神の箱を担いだではない。」と言って、レビ人に神の箱を担がせます。そして15節には「レビ人たちは、モーセが主のことばにしたがって命じたとおり、担い棒を肩に載せて神の箱を担いだ。」とありますように、主が命じられたとおりに神の箱を担いでダビデの町まで運んでいきました。また主の箱を担ぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは、肥えた牛をいけにえとして献げました。歴代誌

第一15章26節を見ますと、「神が主の契約の箱を担ぐレビ人を助けてくださったとき、彼らは雄牛七頭と雄羊七匹をいけにえとして献げた。」とありますが、それはダビデにとっては感謝のいけにえであったということです。

14節「ダビデは、主の前で力の限り跳ね回った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。」とあります。亜麻布のエポデは、祭司が着用するもので、幼き時にサムエルが亜麻布のエポデを身に着けて、主の前に仕えていたことがサムエル記第一2章18節に記されています。ですから、ダビデが亜麻布のエポデをまとっていたというのは、いけにえをささげつつ主を礼拝していたことを意味しているのでしょう。さらに15節では「ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上げた。」とありますように、主を心から喜びつつ、主の箱を運び上げました。

ダビデのすばらしさを私たちはここに見ます。レビ人がいなかったということがあったにしても、牛に荷車を引かせることで主の箱を運ばせるような不敬虔なことをしたダビデでしたが、自分の過ちに気がついたなら、すぐに悔い改めて、主が命じられたとおりに行う信仰の従順さを持っていました。私たちはどうでしょうか。主は私たちに人としての完全さを求めているのではなく、示された罪をすぐに悔い改めて主に従う信仰の従順さを求めているのです。

4月29日（水）サムエル記第二6章16節

「主の箱がダビデの町に入ろうとしていたとき、サウルの娘ミカルは窓から見下ろしていた。彼女はダビデ王が主の前で跳ねたり踊ったりしているのを見て、心の中で彼を蔑んだ。」

16節においてサウルの娘であり、ダビデの妻であったミカルのことの特筆されています。ミカルはダビデのことを愛していました。そしてダビデが王の婿となるために王に対して約束を果たしたので、サウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えました。（サムエル記第一18章20、27節）その後パルティエルの妻となっていたにもかかわらず、ダビデは妻ミカルをもう一度取り返しました。聖書には、ダビデとミカルの結婚生活について詳しく記していませんが、ミカル自身がダビデに対してさまざまな感情を抱いていたとしても不思議ではありません。いずれにいたしましても、15節「ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上げた」にもかかわらず、ミカルだけはダビデが主の前で跳んだり踊ったりしているのを見て、心の中で彼を蔑んだのです。つまり、ミカルだけが、主の箱に対して何の関心も示さず、イスラエルの中で孤立した存在となっていました。

主の家である教会の中で、自分だけ孤立している人はいないでしょうか。何となく自分だけ

交わりの中に加わることはできないとか、主日礼拝においても自分だけ浮いているように感じるということはないでしょうか。強制することはできませんし、人との関りが苦手という方もおられるでしょう。そのような中にあっても、少しでもともに主を喜ぶ交わりに加わることであれば幸いではないかと思わされます。また私たちの交わり中になかなか加わることでおられない方々もぜひ交わりの中に加わることで、一人で孤立しながら、教会の交わりや私たちの信仰を蔑みながら見るのではなく、ともに主を喜ぶ交わりに加わるができるように祈りましょう。

4月30日（木）サムエル記第二6章17～19節

「ダビデは全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ終えて、万軍の主の御名によって民を祝福した。」（18節）

ダビデの町に入った主の箱は、ダビデがそのために張った天幕の真ん中の定められた場所に置かれました。13節でも見ましたが、ダビデは肥えた牛をいけにえとして献げましたが、所定の場所に置かれてから、ここでダビデは主の前に全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げました。ダビデは、それらを献げ終えると、万軍の主の御名によって民を祝福しました。人々を祝福する行為は、通常祭司たちによってなされますが、特にモーセの例でも知られていますように、指導者も民を祝福することがあったようです。ですから、祭司に代わってダビデが民を祝福したことは、越権行為であるとかしてはならないことをダビデがしたということではありません。そして、例外なくイスラエルのすべての民に、輪型パン一つ、なつめ椰子の菓子一つ、干しぶどうの菓子一つを分け与えました。これは交わりのささげ物として献げられた物の中からすべての人に分け与えられた物だったのでしょう。

ここから私たちは教会の一つのあり方を教えられます。主の箱は、主の臨在を象徴していますが、私たちも主が豊かに臨在しておられることを信じて、時と場所を聖別して礼拝堂とともに集まり、そこで主を礼拝し、主からの豊かな祝福を受けます。そして今度は、主の御前にあって私たちはともに交わりの食事にあずかりつつ、主にあって一つの民とされ、互いに兄弟姉妹とされていることを喜び、感謝するのです。もちろん強制することはできませんが、許されるのであればともに主にある食事の交わりに加わるなら、そこにも主からの恵みがあることを思います。みことばから教えられたことや近況を分かち合う時とするならば、そこには豊かな主の祝福と幸いな交わりが与えられることでしょう。

5月1日（金）サムエル記第二6章20～23節

「私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。しかし、あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。」（22節）

ダビデが自分の家族を祝福しようと戻ると、ミカルがダビデに対して皮肉を言いながら出迎えます。まずここでダビデを「イスラエルの王」と呼んでいることもダビデと妻ミカルの心的距離を感じさせます。「ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、今日、あなたは自分の家来の女奴隷の目の前で裸になられて」と言います。ここだけを見ますと、ダビデが公衆の面前で何も着ていないかのように思えますが、14節には「ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。」とありますので、素っ裸ではなかったはずです。むしろ、ここでミカルが言おうとしたのは、民の前で王としての体面など全く気にすることなく、王服を脱ぎ、民と一緒に喜び踊っていた姿には王としての威厳はなく、そのような自分の立場をわきまえない振る舞いはごろつきと同じだと言いたかったのでしょう。それに対してダビデは、イスラエルの王である自分が身にまとっていた王服をはじめすべての物を脱いだのは、自分を選んで、主の民イスラエルの君主に任じられた主の前だと言います。ですから「私は主の前で喜び踊るのだ。」と言います。ミカルは、周りの人々がダビデの姿を見てどう思うのかということに気にしていましたが、ダビデは常に自分の前に主を置き、主の御前を歩む信仰により、主が自分をどう見られているかを気にしていたのです。特に、ここでダビデは主を「自分を選んで、主の民イスラエルの君主に任じられた主の前だ」と言います。つまり、自分がイスラエルの王とされたのは、自分の願いや力や家柄によるのではなく、主の選びによる、すなわち今の自分があるのは、すべて主の恵みだとの信仰がダビデにはあったのでしょう。ですから、主のためであれば「私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。」と言います。そして「しかし、あなたの言う、その女奴隷たちに敬われのだ。」というのは、自分の信仰を理解する者たちはダビデを、その信仰のゆえに敬うだろうと言っているのです。そして23節の「サウルの娘ミカルには、死ぬまで子がなかった」ということについては、さまざまな解釈が提案されています。例えば、ミカルに対する神のさばきであるとか、完全にダビデとミカルの間で夫婦としての関係が破綻したことにより、ダビデがミカルに近づくことがなかったのではと言われたりしています。

私たちもしばしば人の目が気になります。そして、学歴、社会的地位、周りからの評価など、さまざまな物を着込んで自らの体面を整えようとしますが、主の御前に出る時も変わらず、そのような物を身につけたまま出ようとし、兄弟姉妹の前に出る時も、自分が身に着けたものをもって出ようとしています。主の前にすべてのものを脱ぎ捨てて出ることができ、「私はこれより、

もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。」と言える信仰が与えられたいと思わされますし、教会にあっては、主の前で、そして兄弟姉妹の前ですべてを脱ぎ捨てられる謙遜さを身につけたいと思わされます。

5月2日（土）サムエル記第二7章1～3節

「見なさい。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中に宿っている。」（2節）

6章から7章の間に、どれだけの時間的経過があったかは分かりません。また「主は、周囲のすべての敵から彼を守り、安息を与えておられた。」とありますが、8章1節にはペリシテとの戦いが記されてありますので、完全に周りの国々を征服したわけではなく、一時的に戦いのない状態がダビデにはあったということなのでしょう。ダビデは預言者ナタンに「見なさい。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中に宿っている」と言います。ここで唐突に預言者ナタンが出てまいりますが、彼の出自など詳細な情報は記されていません。そして、この2節を引用しながら教会堂建設へと話しを進めるケースが見受けられますが、少し解釈に気をつけなければなりません。と申しますのは、古代中近東におきましては、神殿の建設は、国が平和で繁栄している時になされていました。ですからアヴァーベックという学者が指摘しているように、宮の建設は国の豊かさや繁栄と密接に結びついていると言えます。ですから、ここでダビデが主のために神殿を建てようとしたことの背後には、神の箱を置くための神殿を建てることによって、周りの国々のように豊かさや繁栄を示そうとした意図があったのではないかと思います。ですから、4～7節において主はダビデが神殿を建てることを認めようとはされなかったのでしょう。

私たちも気をつけなければ、世の中の風習や考え方、価値基準等に流されてしまう可能性があります。そして、しばしばそれが主のみこころとは違っていることがあります。ですから、私たちは何かを始めようとする時には、祈って主のみこころを確認しなければなりません。そして、もし間違った方向に進めば、主はみことばの語りかけをもって必ず軌道修正してくださいます。ですから謙遜に主の御声を聞き、間違ったらすぐに悔い改めて、主のみこころに従いましょう。